

---

# 兄と妹

白井太陽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

兄と妹

### 【Nコード】

N3340Z

### 【作者名】

白井太陽

### 【あらすじ】

兄と妹がただただ下ネタ談義をするアホ小説。 あー、下ネタ小説読んでー、読まないと死ぬわー、と日々思われている奇特な方にオススメです。

「兄ちゃんさあ、あたし、何事でも一つのこと熱中出来るってすごい事だと思っただよな」

夏休みのある日。突然。何の前触れもなく。僕は妹にそんな事を言われた。インマイルーム。

僕は逆に問いかける。

「どうしたんだ、マサヒコ？ 急にそんな話をして」

「？ マサヒコ？」

やべ、間違えた。

「ああ、悪い。ゲームのヒロインでそんな名前のキャラがいて、一緒にしちゃった」

「何その先生を間違えてお母さんって呼んじゃったみたいない訳！ てかマサヒコで！」

うるせえな。マサヒコはいい奴なんだぞ？ 偉い人にはそれが分からんのですよ。

「で、何だよ雪菜？ 急にどうしたんだ？」

こいつが、そんな事言い出すなんて珍しい。何かあったのかな。

妹、ひの日野雪菜は、自分の頭をガサツに掻きながら、  
「いや、ただ何となくだ」

と、言った。

何となくだった。そうかよ。

雪菜について詳しく説明するとしたら、先程、まるで親の敵のようにボリボリと掻いていた頭は、ゴキブリのように黒々しく艶がかったツインテールで、目は、バジリスクが痛みを堪えているときと同じくらいにツリ目。性格は、「コイツ、性同一性障害なんじゃね？」と思うくらいにボーイッシュな中学三年生である。胸もボーイッシュで、Aカップ中のAカップ、トリプルエーカップAAA（というのがあるらしい）の

名を欲しいままにしている。一応、美人の部類には入るらしいのだが、妹をそんな風に見たことがないし、見る気もしない。こんな感じで説明出来ているだろうか。

まあ、妹の説明はともかくとして、僕の説明を自分でするのは、少し抵抗があるから必要最低限の情報しか言わないという事をあらかじめ理解しておいて欲しい。では。

僕の名前は春臣<sup>はるおみ</sup>。日野春臣だ。下の名前を先に言ってから、フルネームを言つとなんか格好良く感じるよね。  
以上だ。これ以上は何も言わない。

「なあ、年齢は十八歳で、前髪で目元が隠れるくらい長い黒髪で、身長が百六十五センチと小さいのがコンプレックスな兄ちゃん」  
無理矢理に紹介されてしまった。

しかも、最後の方に僕のコンプレックス暴露されてしまった。

まあ、いいや。減るもんじゃないし。心の広い兄貴。プライスレス。

「いやさあ、聞いてくれよ。この前、友達がクラスでプリキュアのコスチュームにはそこはかかないエロスを感じる、って力説しててさ」

「その友達紹介しろ」

「？ 男友達だぞ？」

「今すぐそいつと縁を切るんだ！」

男でプリキュアが好きなのは、僕以外みんな変態だ。

「まあまあ。でさ、そいつの顔がなんかイキイキしててさ、『いいな』って思ったんだよ」

妹は持ち前のツリ目を細めて、ニッコリと笑いながら、そういつた。

『いいな』って思ったんだよ。じゃねえよ。よくねえよ。

「それって、そういうオタク系でもなのか？」

「うん。まあ例外もあるけど、あたしも何でもいいから熱中出来る事欲しいなって思ってたさ。考えてみてもなかなか見つからないんだ。

何かあたしが熱中出来る事ってないかな？」

「はあ？ 知るかよ。んな事言われても、自分の熱中出来る事を他人に教えて貰うなんておかしいだろ。」

「そう伝えると、雪菜は少し悩んだ後、

「じゃあ、兄ちゃんが熱中出来る事を教えてくれよ。あれば、でいいんだけどさ」

「みたいな事を言った。」

「まあ、確かにあるっちゃあるが……」

「おお！ 何だ何だ！？」

「マサヒコ」

「そうか！ それでさ兄ちゃん。あたしは地球温暖化について思うところがあるんだよね」

「露骨にスルーされた……！」

「ああ、嘘だよ嘘。ちゃんと話すから。頼むから兄ちゃんをスルーしないでくれ」

「ったく。分かりゃあいいんだよバカ兄ちゃん」

「うるせえメス豚。」

「お前さては、マサヒコに僕を取られて嫉妬してるな？」

「で、改めて訊けど兄ちゃんには熱中出来る物って何かあるか？」

「熱中出来るもの？ あるぞ。ちゃんとしたのが」

「お！ 何だ！？」

「おっばい」

「そうか！ それでさ兄ちゃん。あたしは世界保健機構について

「

「おっばいってさあ」

「スルー出来ないだど！？」

「おっばいって、『形』じゃなくて『味』だと思っただよね」

「あたし、もうついていけない……！」

「いや、待て雪菜！ 誤解だ！ お前は兄ちゃんを誤解している！

「！」



「何だと!?!」

さあ、何でしょう?  
にしても。

「あゝあ……。分かんないのかなあ……。やっぱ」

「な……。何だよ……。兄ちゃん」

僕が溜め息交じりに呟くと、妹はそれにピクリと反応して、訝しげに僕を見ながら質問してきた。

「いやさあ、おっぱいってそんなエロい言葉には思えないんだよね」

「いや、何ちよつと章変えてんだよ兄ちゃん！」

妹がそんな事を言った。うるさいなあ。

「なんか、いい感じだったじゃん？ 流れるにさ」

ほら、化物語っぽいじゃん。

「あたしが兄ちゃんにセクハラ紛いのことをされてどこの流れがいんだと突っ込みたくなる気持ちは山々なんだけど、それはとりあえず置いておいて」

とりあえず置いておかれた。よかった。捕まるかと思った。

「どうして、それがエロくないと思うんだ？」

「うーん……。そうだなあ、あつ。じゃあ、それを踏まえた上でもう一度おっぱいって十回言ってみるよ。僕は録音するから」

「うん。……ええっ!？」

「何だよ」

「いや、『何だよ』って兄ちゃん。何で録音するのさ」

「自分で言っただけじゃ分からないかもしれないだろ。だったら、聞いてみればいってただけだ」

「じゃあ、兄ちゃんが言えればいいじゃん！」

は？ 何言ってるんだこいつ？ バカじゃねえの？

「お前、そんな事言ったら変態だと思われるじゃねえか」

「畜生っ！」

まったく、そんなのも分からないなんて本当にバカだな。僕の妹とは思えないよ。

そんな僕の態度に腹を立てたのか、雪菜は少し声を荒げて言う。

「そんなんだつたら、あたしじゃないよ！」

「別にいいよ。お前のキモい声なんか僕だって録音したくないし」

「うがぁ」

「!!」

そんなこんなで。

閑話休題。

最初の話に戻そう。

「最初の話って、あたしが熱中出来る事の話か？」

「いや、おっぱいは『形』じゃなくて『味』だってとこだ」

「……………」

怪訝な顔された。何だその目は。気持ち悪いぞ？

「いや、まあ雑学になるんだけどさ。おっぱいって二足歩行の生物にしかないらしいぜ？」

「え？ そうなの？」

「知らなかったー、と妹。

「ああ。普通、動物っていうのは雌のケツを見て発情するんだよ。んで、犬とかはすぐ目の前に来る位置にケツがあるからそれでいいんだけど、二足歩行になると目の前にケツがなくなるから欲情出来ない。それはマズい、ということ目の前にケツを創った。それがおっぱいなんだよ」

まあ、割りと有名な雑学だけだな。『通』の間では。

何の通だよ。

「そうなんだ……。それで、最初の話　その、『味』っていうのは？」

「うん。だから、胸の谷間って糞の味がして然るべきだと思っただよね」

「兄ちゃんがマニアックだよおおおおおおおおおおおおおお  
お　　！！」

うるさいなあ。死ねばいいのに。

「おい、僕のどこがマニアックなんだ？　僕のエロ本を見ても全部普通じゃないか！」

「いや、でも触手は」

「やめろ、触手の話はするな」

まったく、人の揚げ足ばかり取る最低の妹だな。

どうして僕に似なかつたんだろう。可哀想過ぎる。

「あ……」

僕はふと時計を見て思わず、声を漏らしてしまった。

十四時半まで、あと、十五分ほどしかない。

仕方ない。不本意だけど真面目に話すか。

「いいか、雪菜？ 熱中出来るものなんて、本当は皆そうなんだよ」

「え？」

「探すべきは、熱中出来るものじゃなくて、熱中するものなんだ。

熱中なんて、しようと思えば誰だって、何にだって熱中出来る」

「……………」

「僕はさつきまで、おっぱいの話をしてただろ？」

「……………うん」

僕は少しだけ、間を空けて、はっきりとした口調で言う。

「僕はおっぱいは嫌いだ」

「嘘だっ！」

まあ、嘘だが。

「要は、熱中するものを探すんじゃないかって、何に熱中するか、なんだよ」

「よく分からないなあ……………」

バカな妹だ。こんなに分かりやすく言い換えてやったのに。

しゃあない。超分かりやすいたとえを使ってやろう。

「つまり、お前は僕におっぱいを見せる事は出来るけど見せたくないだろ？ つまりそういうことだよ」

「お前、絶対おっぱい好きだろ！？ しかも、今のあんま関係ないよねえ！？」

「そつだよ悪いか！！」

「開き直るな！！」

妹として恥だよ と、最後に付け加える自他共に認める妹。

さつきからうるさいなあ。妹じゃなかったら襲ってるぞ？ 僕の妹だった事に感謝しろ。

「まあ、最終的な話、というか、根本から覆すような話をすると、

熱中出来るものを他人に訊くって時点で間違ってるんだよ」

「て事は、さっきまでの会話は全部無駄だったって事かよ！」

「　　なんて、言うと思っただか？」

「何その騙し！　ドヤ顔すんな！！」

「はいはい。真面目に話すよ。」

「まあ、お前はこっやって、他人に自分の熱中出来る事は何か、と訊く事に熱中してるわけだろ？」

「え？　何そのモヤモヤっとする感じの答え」

「じゃあ、それでいいじゃん。お前の熱中する事」

「嫌だよ！　それあたし超悲しいじゃん！」

「うるせえなあ。早く家から出てけよ」

「急に冷たい！　どうしたんだよ、兄ちゃん！」

「問い詰めるような形で訊いてくる妹に、

「だって

「僕は今一度時計を見て、十四時半の五分前だという事を確認してから言った。」

「だってもうすぐ、家に彼女が来るんだもん」

「へ？ 兄ちゃん、彼女いんの？」

妹が今更な事を訊いてきた。

「おう、何だ？ 言ってなかったか？」

「全然聞いてないよ！」

「僕は今、彼女に熱中しているのさ！」

「うわ、リア充！」

「正確には彼女のおっぱいに熱中してるのさ！」

「最低か！」

「最低だ！」

「言い切った！」

言い切りますとも！

「で、何？ どこまでいったの？ チューした、チュー？」

興味深々だ。この思春期め。

仕方ないから答えてやるか。

「おっぱい見た」

「マジで！？」

「服の上から」

「普通か！」

「いや、だって恥ずかしいし」

「ピュアか！」

「卒業したら結婚するんだ！」

「マジで！？」

「そして俺も卒業するんだ！ 性的な意味で」

「黙れ！」

「筆下ろしふであとも言っぜ！」

「ルビを振るな！」







「……………」

「ウン、イイヨ」

なにこいつ超怖い。

「その代わり、僕の彼女には、本当に、何も、変な事、するなよな！」

区切り区切りしつかりと妹に伝える。内心ビビってる事を隠しながら。

「おっけー。ありがとうな兄ちゃん！ そんじゃああたしは玄関に彼女さんが入ってきたときは、玄関が見渡せる階段の近くで、まるで星飛馬の修行を見るような目で見てるから」

そうか。

何はともあれ、今、彼女を玄関の前でこの暑い中（忘れてると思うが、今は夏休みだ）立たせている訳なので、早く出迎えなければ。

「悪いな鈴葉<sup>すずは</sup>。今開ける」

玄関のドアの鍵を開け、そして扉を開けると、カラコーンという風鈴の音が僕の耳に響いた。

その風鈴の音色と共に、視界に入ってきたのは赤みがあったロングヘアーに、澄んだ大きな瞳。薄紅色の綺麗な口唇。女性にしては大きい、推定百六十三センチ（僕の目測）の身長。そして女性にしても、大きすぎるおっぱいだった。おっぱいだった。

そのおっぱいの持ち主にして僕の彼女、月見里鈴葉<sup>やまなし</sup>はドアが開くと、玄関に入りながら挨拶してきた。

「やっほー！」

「おう。おはよう」

「えっと……………」

「？ どうした？」

「……………ゴメン、名前忘れた」

「お前それでも僕の彼女か！？」

日野春臣。紹介しても一向に名前を呼ばれなかったから、まあ、仕方ないんだけどネ

「そつだ、思い出した！ マサヒコだ！」

「違う。そんな、ゲームのヒロインみたいな名前じゃない」

「君はどんなゲームをやってるんだ!？」

エロゲだよ。

「まあまあ。冗談だよ、春臣。好きな人の名前なんて忘れる訳ないでしょ?」

「そつ言いながら、笑った後、  
」

と、鈴葉は僕の後ろで星飛馬を見守るが如く見守っていた雪菜を一瞥し、質問する。

「後ろの子は誰？ 妹？」

「いや、肉奴隷だ」

「何だと!？」

何でもいいじゃん。

「冗談だよ、冗談」

「だ……だよ。さっきの仕返し？ もうやだなあ。アハハ」

「なんて、言つと思つたか？」

「何その騙し！ ドヤ顔すんな!!」

言つ事が妹と同じだ……。

「ドウドウ。妹だよ妹。自他共に認める妹。妹の雪菜だ」

「雪菜ちゃんか」

「そして、これが妹のパンツだ」

「何でこれを彼女を家に迎え入れるときに提示したの？ 迎え入れる気ゼロ?」

「冗談だよ。これは僕のパンツだ」

「女モノの下着を穿くの!？」

「いや、違う」

「じゃあ、どういう事よ」

「そう聞いてきた彼女に、僕はしっかり間を溜めてから言つ。」

「誰にも渡さないという意味だ」

「だから、何でここで章を変えるんだよ兄ちゃんは！」  
妹の雪菜が堪らず飛び出してきた。出てくるタイミングは違うと思っけど。あと、メタ発言マジウゼエ。

「うるさいなあ。死ねばいいのに」

「うわっ素で言ったよこいつー！」

「兄ちゃんにこいつとか言うな。分かったなクズ」

「理不尽だ！」

って妹に構っていると、彼女と話せなくなってしまうのではないか。

という事で、何とかこの会話を切ると、今度は鈴葉が、

「えと、雪菜ちゃん」

雪菜を呼び止めた。

「私、月見里鈴葉。あなたのお兄さんとお付き合いさせて貰ってるわ。よろしくね」

「あ、こちらこそ紹介が遅れました、日野雪名です。よろしくお願  
いします」

礼儀正しいのね と、鈴葉が右手を出した。これは「舐める」  
ではなく、握手だ。

その手をおずおずと握る雪菜。

「……………」

つまり。

「おい、もっとこう下ネタ盛り込めよ。握手してるだけじゃつまん  
ねえよ」

「は……………春臣……………」

「あ……………兄ちゃん……………。兄ちゃんってあれだね。下ネタがないとダ  
メなんだな。なんか、アメリカのアニメで似たようなのあった気がする。  
ほっれん草食べて元気になるってみたいな」

「え？ ほっれん草に精力剤の効果あったっけ？」

「いや、そうじゃなくて、ものはあれだけど、ちょっとだけ似てないか？ えっと、確か名前は……、うーん……」

「おっぱい」

「そう、ポパイだ」

「どうでもいいな。」

「まあ、いいや。そういや、立ち話もなんだよな。」

「おい、鈴葉。とりあえず、上げれよ」

「うん、おじゃまします」

「俺の部屋案内するよ。外暑かっただろうし、部屋はクーラー効いてるから休んでおけよ」

「いや、いいや。春臣の部屋ってイカ臭そうで嫌だし」

「ハツハツく分かったぞお、お前さては僕の事嫌いだなあ!？」  
てなわけで、リビングに移動。

たわいもない話が十分くらい続いたところで、雪菜が、「あ、そういえば」と何か思いついたような事を言った。たぶん、これがこの話の最後のネタバレとなるはずだ。

「あ、鈴葉さん。あの、少し聞きたい事があるんですけどいいでしょうか？」

「ん？ 何何？ 何でも聞いて？」

「今、熱中してることってなんですか？」

「え？ そりゃあもちろん」

「もちろん」

「そりゃあもちろん、彼氏 春臣に熱中してるよ！」

「あ、やつぱりですか？ 実は兄ちゃんもそんな事言ってる」

「まあ、正確には、春臣の子」

「いや、それを言っちゃダメでしょう!!」

「……………僕が言うのもなんだが、果たしてこんなオチでいいのでしょうか？」

## 004 (後書き)

というわけで、この話は今のところこれでおしまいです。

しかし、続編希望の方がいらっしやれば、書くと思います。

いや、そんな人流石にいねえよ。

そんな感じのお話でした。

めでたしめでたし。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3340z/>

---

兄と妹

2011年12月11日15時49分発行